

Katsurao Collective

Report 2022



Katsurao Collective

Report 2022

はじめに

本冊子は、2022年度に福島県双葉郡葛尾村で実施したアーティスト・移住定住事業の活動をまとめたものです。

2011年3月11日に発生した東日本大震災とそれに伴う津波により、福島第一原子力発電所で発生した原子力事故の影響により、葛尾村の全村民は村外に避難を余儀なくされました。2016年6月に帰還困難区域を除いて避難指示が解除され、2022年6月には特定復興再生拠点区域の避難指示が解除になりました。

本事業では、村への短期移住者という形でアーティスト・クリエイターを地域へ招聘し、彼らの活動をサポートしていくことで、新しい観点から地域の魅力を発掘・形にしていくことを通じて、創造力を基点にした地域コミュニティの創出とその継続の方法を探っていきます。

この場をお借りして、本事業に参加いただいたアーティスト、クリエイターの皆様、事業運営にご協力いただいた全ての皆様に、心よりお礼申し上げます。

Katsurao Collective
事業統括 森健太郎

Introduction

This report summarises the work done as part of the artist-in-residence and resettlement projects in the village of Katsurao.

The Great Northeastern Japan Earthquake on March 11 2011 and the tsunami that it caused brought about the disaster at Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant. As a result, all the residents of Katsurao were left with no choice but to evacuate. With the exception of the exclusion zone, the evacuation order was lifted in June 2016 and in June 2022, the evacuation order for the special zones for reconstruction and restoration were lifted.

The program invited artists and creators as short-term residents of the village and supported them in their work so that their fresh perspectives might uncover and give form to what the region has to offer. It is in this way that we continue to explore how to create and sustain a local community rooted in creativity.

I would like to take this opportunity to thank from the bottom of my heart all the artists and creators who took part in the project, as well as everyone who contributed to its operation.

Katsurao Collective
Director MORI Kentaro

目次

はじめに	2
アーティスト移住・定住事業について	4
Katsurao Collective (カツラオコレクティブ)について	5
Katsurao AIR	7
前期活動概要	8
赤坂有芽	10
石川洋樹	14
後期活動概要	20
太田祐司	22
尾角典子	26
山口諒	30
山田悠	34
アーティストプロフィール	38
Katsurao AIRについて	41
かつらお企画室	43
大内梨沙	44
岡崎みゆき	46
井上康子	48
竹村望	50
遠藤英徳、丹伊田政治、松本和雄	52
松本夕美	54
かつらお企画室について	56
寄稿 林曉甫	58
メディア実績	62
事業構造・年間活動実績	63
活動記録写真	64

アーティスト 移住・定住事業について

東日本大震災による原発事故の影響は村の人々の生活を大きく変えました。12年経った現在もその余波は大きく、村に戻ることができない人々も多く存在しています。一方で、多くの研究者や若者が引き寄せられるようにこの地に集まってきています。

本事業では、アーティストやクリエイターの地域での活動をサポートすることを通じて、村に眠る資源や魅力を発掘します。2022年度「Katsurao AIR」（アーティスト滞在事業）では、地域にアーティスト・クリエイターを受け入れ、彼らの視点から地域の魅力の発掘と調査を行いました。また「かつらお企画室」（ワークショップ事業）では、月一回のワークショップの開催を通じ、地域の魅力に触れる機会を創出するとともに、村内外の人材の交流の場を作り出しました。

ほかにもアーティスト・クリエイターと一緒に活動できるスタジオ整備、コワーキングスペース運営など、さまざまな企画・取り組みを通じ、移住の促進、地域のコミュニティの維持再生、新しい関係性作りを目指します。

Artist Short-Term and Permanent Residency Program

The nuclear disaster that followed the Great Eastern Japan Earthquake led to a massive upheaval in the lives of the village residents. Even now, twelve years later, the repercussions are deeply felt and many people are still unable to return to the village. At the same time, however, many researchers and young people have been drawn to the region.

This program aims to uncover the village's untapped resources and points of interest by supporting artists and creators to carry out their work here. The 2022 Katsurao AIR (Artist in Residence) Program brought artists and creators into the community where they applied their own perspectives in researching and unearthing what captivated them about this region. In addition, the Katsurao Workshop Space held monthly workshops that generated opportunities to get up close with what they unearthed and created a space for exchange between people from inside the village and out.

Besides that, through a range of projects and initiatives that include setting up a studio where artists and creators can work together and a coworking space, we hope to encourage people to move here, preserve the local community, and find new ways of building connections.

Katsurao Collective （カツラオコレクティブ）について

現代アートが社会での実践を展開し、アートと社会との接点が深まる現代において、“アーティスト・コレクティブ”※の存在はますます重要になってきています。コレクティブという枠組みは、アート活動を個人主義的な創作活動の枠から解き放ち、より多様でフレキシブルなアートの形を社会へと提示します。多様な価値観を持ちながら、創造性という価値でつながり一緒に活動を始める。Katsurao Collective は、この地でそのようなコレクティブとなることを目指すプロジェクト名であり、創造性という価値でつながる共同体の名前でもあります。

※共通の目標を達成するために活動するアーティストによって形成された集団

The Katsurao Collective

Artist collectives are becoming more and more vital in the modern age as the practice of contemporary art develops in society and the connection between art and society deepens. The framework of the collective frees art from the restrictions of individualistic creative practice to present art to society in a more diverse and flexible form. The Katsurao Collective is the name given to both the project to form such a collective in this region and to a community bonded together by respect for creativity.

Katsurao AIR

Katsurao AIR

前期活動期間

2022.5.1 - 2022.9.30

葛尾村滞在30日間



前期招聘アーティスト
Invited Artists for the First Term

赤坂有芽 / 石川洋樹
AKASAKA Yume / ISHIKAWA Hiroki

展覧会
EXHIBITION

Travel in the Hole
トラベルインザホール

【会期】 2022.9.23(金・祝)-2022.10.10(月・祝)

【会場】 葛尾村立葛尾中学校(休校中)
1F/3F/体育館
葛尾村復興交流館あぜりあ
交流スペース2

アーティストトーク
ARTIST TALK

【日時】 2022.9.24(土) 14:00-15:30

【会場】 葛尾村復興交流館あぜりあ
交流スペース1

【登壇者】 赤坂有芽 / 石川洋樹
AKASAKA Yume / ISHIKAWA Hiroki

【ファシリテーター】 五十嵐純
IGARASHI Jun

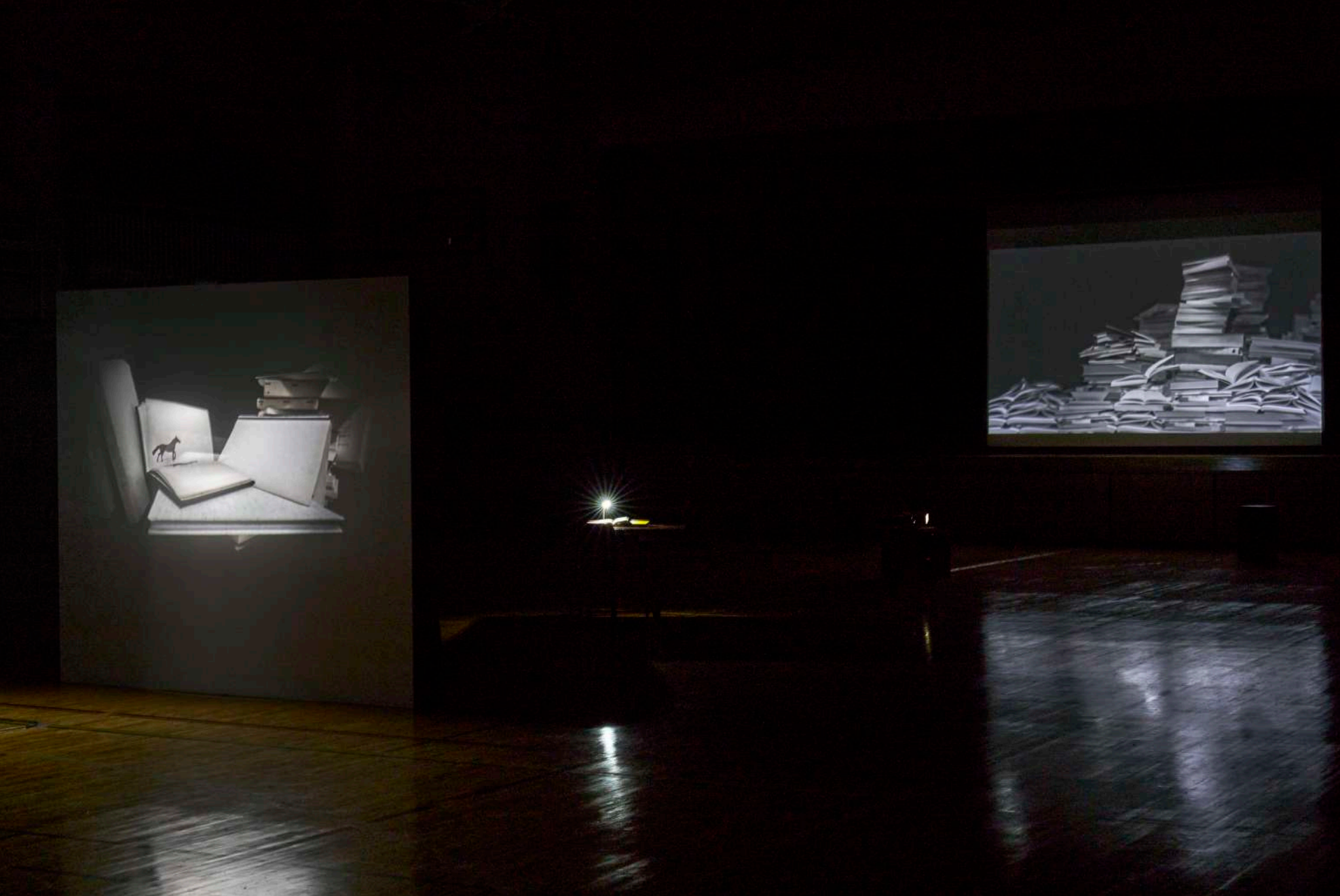
関連イベント
EVENT

【日時】 2022.6.25(土) 13:00-14:30

【内容】 トークイベント「持続可能性への新しい道」

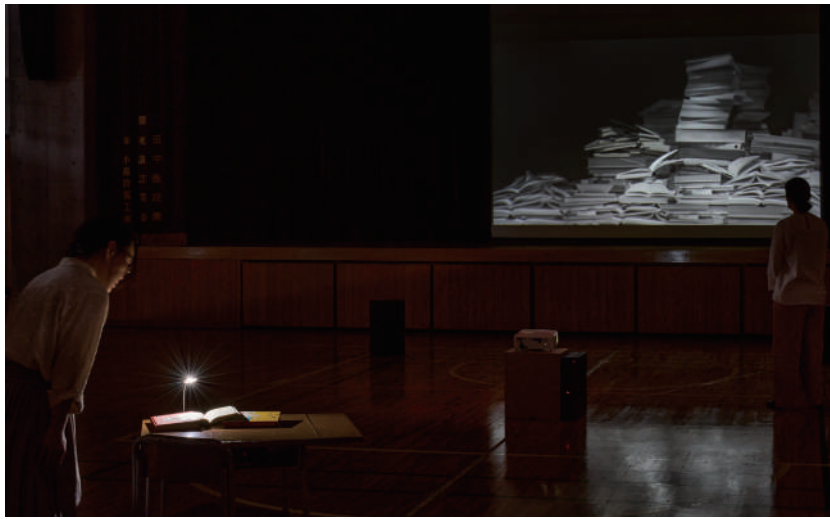
【会場】 葛尾村復興交流館あぜりあ
交流スペース1

【登壇者】 石川洋樹 / 田尾陽一
ISHIKAWA Hiroki / TAO Yoichi



《土着[Vernacular]のための習作》
Study for [vernacular]
2022 -

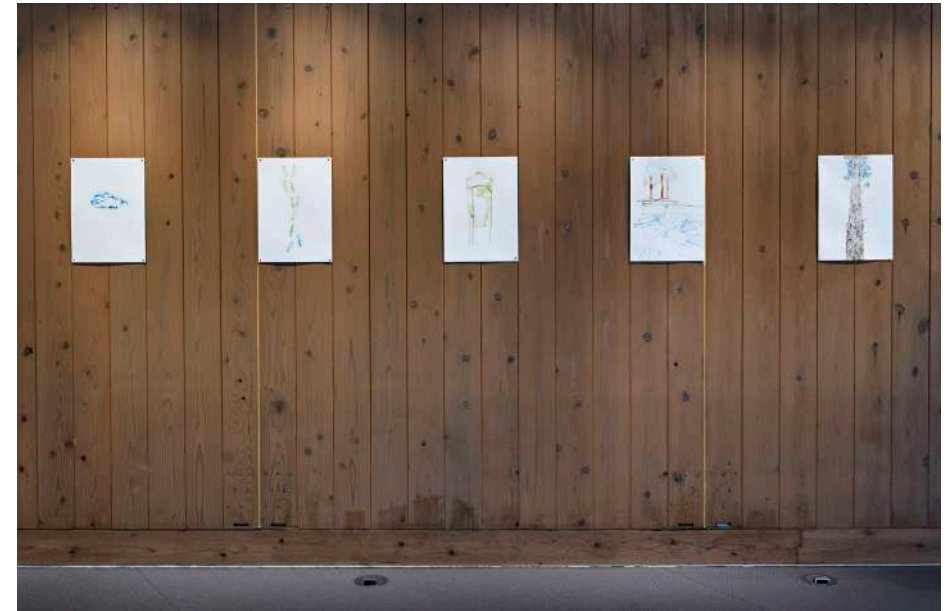
ビデオインスタレーション
Video Installation



葛尾村でのフィールドワークにて、村民の方々へインタビューを行い、村の歴史や慣習、行事の話や個人的な思い出などを語っていただいた。思えば、作家として滞在期間中に村についてを調べていたことは、村外から訪れてみて何となく感じた違和感の理由を追っていたのだと思う。
村の昔の物語を、めったに開かなくなった本の集積にイメージを重ねている。

In my fieldwork in Katsurao, I interviewed the residents who told me about the village's history and customs, stories about its festivals, and their personal memories. When I consider why I tried to learn about the village during my residency, I think it was because I was looking for the source of the incongruity I felt when I first visited as an outsider. I superimposed images of the village's old tales over stacks of books that are now rarely ever opened.

取材者：鎌田毅 半澤富二雄 白岩サチコ 菅野好雄 遠藤英徳 松本俊男 松本忠彦
Cooperators: KAMATA Tsuyoshi, HANZAWA Fujio, SHIRAIWA Sachiko, KANNO Yoshio, ENDO Hidenori, MATSUMOTO Toshio, MATSUMOTO Tadahiko



《土着 [Vernacular] のための習作》
Study for [vernacular]
2022 -

ドローイング
Drawing

人の眼差しの奥を見る事は遠くを想像する事に近いような気がする。
私は葛尾村で出会った方々に5分間だけボーッと欲しと伝え、
カメラの録画ボタンを押し、その場から離れる。
そして5分後に録画をストップする。
ただそれを繰り返し、それぞれの無意識な状態をカメラが捉えた。
鑑賞者と被写体との間に暗黙の時間が流れることになる。
さて、その暗黙の時間に思いを馳せることができるだろうか？

Looking deep into someone's eyes is almost like imagining
somewhere far away.
I asked the people I met in Katsurao village to let their minds wander
for five minutes, then I pressed the record button on my camera and left.
When five minutes had passed, I stopped the recording.
Through simple repetition of this process, I captured the unconscious
of each person through the camera.
An unspoken moment passes between the viewer and the subject.
In that moment, can you imagine what their faraway eyes saw?

《遠い目を見て遠くを見る》
Looking "the eyes" far away

4K Video (loop)



《無題 (ビデオ作品の為のドローイング)》
Untitled (Drawing for video work)



《薮》 bush

モニター3台、写真、葛尾住民の言葉
Three monitors, photos, words of Katsurao residents.

《アーティストのメモ》
Artist's memo (*Enjoy with ~~your~~ our problems*)



《無題（ブランドローイング）》
Untitled / Plan Drawing

《呼吸》 Breathing

サウンド、校内スピーカー
Sound, school speakers

Travel in the Hole

先日南米アマゾンにて、とある未接触部族の最後の男が亡くなったというニュースが流れました。未接触部族とは、異なる種族、文明との接触がない部族のことをさし、Man of the Hole (穴の男) と呼ばれていた男は、土地開発や経済利益のために追いやられ、仲間を失い一人で過すうちに、かつてあった文化的な習慣を無くし、ただただ生きることのみで暮らしてあったそうです。狩猟や、身を隠すために彼が掘った深い穴の中から、彼は仲間(コミュニティ)や文化を失った後の世界をどのように見つめていたのでしょうか。

そんな彼の境遇を、現代文明と濃密に接触する私たちも自分のこととして捉えられるならば、わたしたちもまた自身の掘った穴の中より世界を見つめる一人かもしれません。現代文明に暮らす人間であっても状況や時代の変化により、彼と同様な状況が訪れることが容易いことは、多くの人が理解しているのではないのでしょうか。

ここ葛尾村では3.11東日本大震災による原発事故の影響により居所を離れて他所の土地へ移動を余儀なくされ、この状況もまた人間社会の経済利益や発展の結果、今まであったものを手放さざるを得なく、穴の男と同様に現代文明から巡ってやってきた出来事は同じように感じられます。文明の発展を促すための技術革新が進む中、人工知能AIの進化や情報通信の高速化により5G、6G技術が普及すれば、ますます効率化が進む世界に暮らすことでしょう。そんな暮らしの中で、誰しもが個としての活動を行いやすくなることが予想され、かつての人と人との交流の中で成り立つような慣習や文化を失う可能性があります。わたしたちが今後を案じ、次の世代が暮らすに値する地域であることを望むのであるのなら、予期せぬ来訪者や出来事とどのように共同するかが大切ではないかと考えられます。穴の男は外部からの接触を自ら拒んでいました。彼の痛ましい過去の境遇を思うと仕方がないことかもしれませんが、もし彼が見知らぬ来訪者との交流があったのなら、もしかしたら異なった展開が彼にあったかもしれません。本事業の目的の一つに、アーティストの活動を通

して地域の情報を再発見、発掘すること、そしてその内容を広く伝達することにあります。このことから思い起こされるのは、世界的なSF小説『息吹』(テッド・チャン著)に“あなたの仲間の探検家たちが、われわれの残した書物を見つけて読めば、あなた方の想像力の共同作業を通じて、わたしの文明全体が生き返ることになる。”—これは、宇宙が無限でないことを憂う主人公が、自身の文明世界が失われた後に、だれかが単なる資源発掘や空間としての扱いで利用するのではなく、探検家のように調査し、得られた情報から想像することで、どのような文明であったか知って欲しいと願う場面の一部です。

アーティストらは、葛尾村を基点としたリサーチ活動を行ないました。しかしながら、この地域一帯は、除染作業により削られた表層の上に違う場所の土を被せられるなど、土地の歴史や経緯を知る手がかりが見つけにくく、活動には困難を伴いました。そのような中で、赤坂、石川が着目し形に現そうと試みたのは、この土地の人々の生きている証明についてだったと考えています。それは、溜息にも似た、僅かに漏れる心の奥底からの感情や吐露のようなもので、アーティストらは彼らの過去や現在に寄り添い、真の生を捉えるため、赤坂はだれかが掬い上げなければ消えゆく記憶の果てへと向かい、石川は散り散りになった時間や思考の一端を集めるような、それぞれ未来へ、未知へと向かうような果てのない旅に出ました。そして、深い穴に入るような探求や制作により現れた作品もまた、この場所にとどまることなく広く旅をすることでしょう。

さて、日本から地球の反対側にある南米アマゾンで暮らしていたMan of the Holeと呼ばれていた男が掘った深い穴の中にも、語られなかった物語が潜んでいること想像するとき、わたしたちは「Travel in the Hole」時間や空間を超越するような想像の旅ができるのではないのでしょうか。彼が見つめた世界とわたしたちは共にあることを忘れずにいるためにも。

キュレーター 山口貴子

I saw on the news the other day that a man who was the last member of an uncontacted tribe in the Amazon in South America had died. An uncontacted tribe is one that has no contact with other peoples or civilizations. This man, known as the Man of the Hole, had been hounded for the sake of land development and economic profit. As he lived on alone after losing his people, they say that he lost his former cultural traditions and his life became no more than a matter of survival. The man dug deep holes to trap animals and to hide inside. Looking out from the bottom of those holes, how might the world have appeared to him after the loss of his community and his culture?

We are in intimately close contact with modern civilization but perhaps, if we were to see ourselves in his circumstances, we too are each of us looking out on the world from holes we have dug. I think most understand that changing times and circumstances could easily see even people in modern civilization facing a situation just like the Man of the Hole did.

After the nuclear disaster brought about by the 3.11 Great East Japan Earthquake, the people of the village of Katsurao were forced to leave their homes and move to other regions—this situation too was brought about by human society's pursuit of profit and development. They had no choice but to relinquish everything from before. It feels as though this disaster came, as it did for the Man of the Hole, from modern civilization.

Technological innovation marches on, its object the advancement of civilization. With the evolution of artificial intelligence along with the proliferation of 5G and 6G technology as information communication grows faster, we will find ourselves living in a world of ever increasing efficiency. The predictable outcome is that all of us will be able to more easily work individually, and this gives rise to the possibility that customs and culture that formerly arose from human communication will be lost.

Looking forwards, if we want a community that is worthy of the next generation, how we coordinate with unexpected visitors and happenings will be vital. The Man of the Hole refused contact from the outside. Maybe the tragic events of his past were unavoidable, but

perhaps if a stranger had come to him and they had communicated with one another, a different path might have opened up for him.

One of the goals of this program is to rediscover and unearth knowledge about this region through the work of the artists, and to then have that knowledge be spread far and wide. This reminds me of a passage from *Exhalation*, the short story by American writer Ted Chiang: “Your fellow explorers will have found and read the other books that we left behind, and through the collaborative action of your imaginations, my entire civilization lives again.” In this scene, the protagonist fears that their universe is not infinite, but hopes that after their civilization is lost, someone will come, not seeking to merely use it for space and the extraction of resources, but to investigate like an explorer, and that by imagining based on what they find, this explorer will learn what sort of civilization it was.

The artists carried out research around Katsurao, but their work came with challenges. During the decontamination process, the top layer of the whole region was stripped and covered over by soil from different places. It was therefore difficult for the artists to locate clues to the land's history and story. Faced with this, Akasaka and Ishikawa focused on trying to give shape to the proof of people living in this land. Like a sigh, this was akin to a barely perceptible effusion of feeling welling up from the depths of the heart. The artists worked to connect with both the past and present of the people here. To understand real living, Akasaka made for the ends of memories that would disappear if no one came to scoop them up, while Ishikawa gathered up fragments of scattered time and thought. Both of them embarked on a journey without end toward the future and the unknown.

Now, when we imagine the untold stories lying hidden in the depths of the holes dug by the Man of the Hole in the Amazon on the opposite side of the world from Japan, we can take a journey of imagination, traversing time and space as we travel in the hole. We must not forget that the world the Man of the Hole looked out on is here with us too.

Curator YAMAGUCHI Takao

Katsurao AIR

後期活動期間

2022.10.1 - 2023.2.28

葛尾村滞在30日間



後期招聘アーティスト
Invited Artists for the Second Term

太田祐司 / 尾角典子 /
山口諒 / 山田悠

OTA Yuji / OKAKU Noriko /
YAMAGUCHI Ryo / YAMADA Haruka

オープンスタジオ
OPEN STUDIO

【会期】2023.1.27(金) - 2023.1.29(日)

【会場】葛尾村立葛尾中学校(休校中) 1F/3F
葛尾村復興交流館あぜりあ

アーティストトーク
ARTIST TALK

【日時】2023.1.28(土) 13:00-16:15

【会場】葛尾村立葛尾中学校(休校中)
3F コンピューター室

【登壇者】太田祐司 / 尾角典子 / 山口諒 / 山田悠
OTA Yuji / OKAKU Noriko /
YAMAGUCHI Ryo / YAMADA Haruka

【ファシリテーター】山口貴子
YAMAGUCHI Takako

関連イベント
EVENT

【日時】2022.12.16(金) - 2023.1.29(日)

【内容】ワークショップ
「葛尾村の100年前 葛尾村の100年後」

【日時】2023.1.15(日) 10:00-16:00

【内容】ワークショップ「ミニ日時計をつくろう！」

【会場】葛尾村復興交流館あぜりあ
交流スペース 2

【作家】山田悠
YAMADA Haruka





村役場に残された20年前のビデオテープの謎を解くために、野行地区にただ 1人 住む村民にインタビューを行った。震災後、多くの人が村に戻らなかったなか、彼があえて村に帰ってきた理由を、ビデオに残された過去の映像をきっかけに紐解いていく。

Ota interviewed the sole resident of the Noyuki area in Katsurao in order to unpack the mysteries of a twenty-year-old video tape left at the village hall. The video lead him to begin to unravel why this person returned to the village after the 2011 Earthquake when most others did not.

《伝承者》 Successor

プロジェクター、メディアプレイヤー、DVD、ビデオテープ、スピーカー

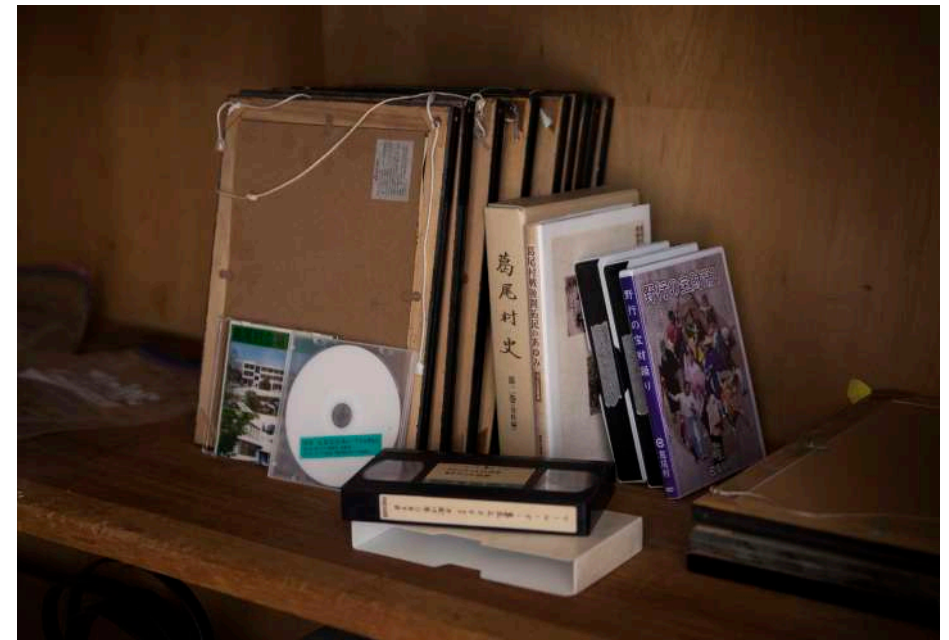
Projector, media player, DVD, VHS tape, speakers

協力者：半澤富二雄 三代純平 小野莉紗子 大矢海果

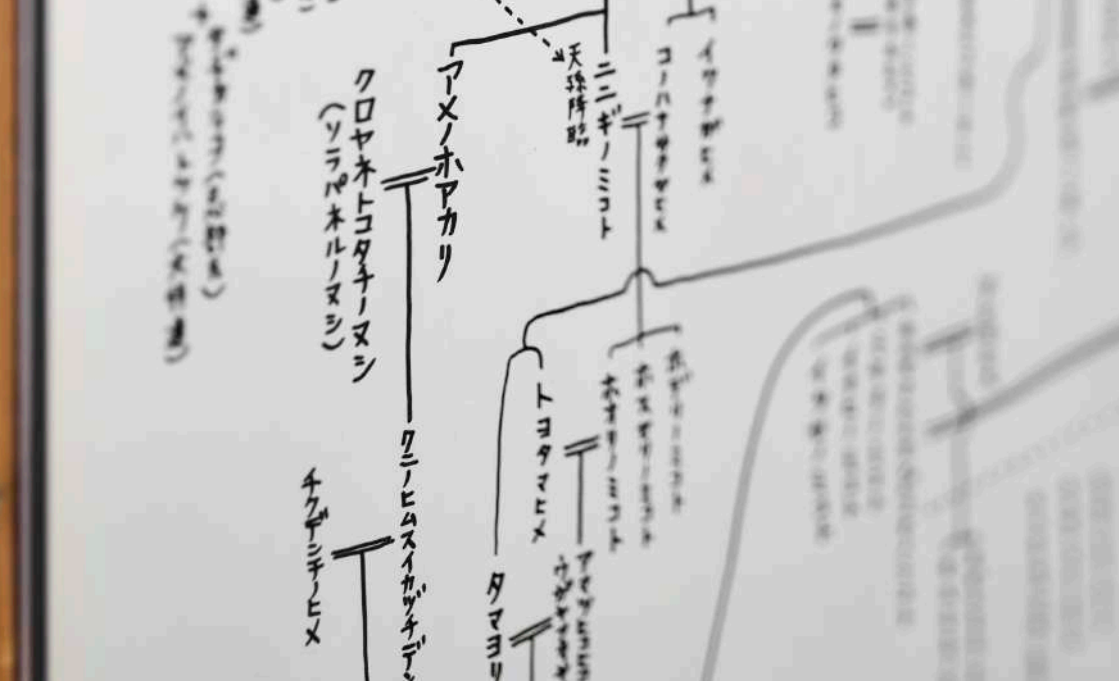
Collaborators: HANZAWA Fujio, MIYO Jumpei, ONO Risako, OYA Haruka

映像：16分28秒、1分59秒

Video: 16m28s, 1m59s







《デンキノカミサマ(仮)》
DENKINOKAMISAMA
(Spirit of Electricity)(provisional)

紙とペン、VR
Paper and pen, VR

尾角は葛尾村に初めて訪れた時に人々の生活の中に不可視なものの存在を感じ、自然と共存する知恵の代名詞でもある八百万の神の考えを持つ日本人の自然観にこれからの時代を生き抜く可能性を感じた。震災以降、葛尾村の復興のためにできた新しい事業や産業の中でも特に電力事業に着目し、電気の時代を生きる私たちの新たな民間信仰のあり方を想像した。今回、彼女の新たな試みとしてヴァーチャルリアリティでの制作に取り組み、現代における電気の神様の可能性を提示することで、不可視なものとの共存を考えるきっかけになる作品づくりを試みた。

When Okaku first visited Katsurao, she sensed the presence of something in the daily lives of its inhabitants that couldn't be seen. The wisdom of coexisting with nature is expressed in the idea held by people in Japan that countless gods and spirits reside in all things. In this way of looking at nature, Okaku felt it would be possible to survive the age to come. Amongst the new initiatives and industries established after the 2011 disaster to rebuild Katsurao, she was drawn in particular to electricity generation and imagined a new kind of folk belief for us, living as we do in this age of electricity. Here, Okaku took on the fresh challenge of working with virtual reality to suggest the possibility of a Spirit of Electricity for the modern era. She hopes that through this, her work will provide an opportunity to think on coexisting with unseeable things.



《The Interpreter(付属品)》
The Interpreter(attachment)

タロットカード
Tarot cards

第一部

葛尾村には八幡神社の祭礼に御神輿の行列を見守る「かご馬（籠馬）」という行事がある。これは馬の形をした板と布を被せた籠を身につけ、顔には墨で隈取りのメイクをした男児達が練り歩くものである。このメイクは大人の悪戯心もあって、祭りが行われる度に変化していった。この行事は約30年以上前から行われていない。今回の滞在では村民の方に、かご馬のメイクを描いてもらった。

閑話

滞在中、雪が降った。

その景色はブラウン管テレビのノイズのように見えた。

第二部

伝統芸には「襲名」という制度があり、この「襲」という文字には「かさねる」という意味が含まれている。先代の経験や精神を引き継ぎ、行為やしきたりを「かさねる」ことで伝統に重みと奥行きを与えて継続させているようにも捉えることができる。

「かご馬」は、メイクが役割を担う子供の顔に引き継がれることで身体的経験を間接的に伝えているようにも伺えた。リサーチで収集したメイクをもとに、作者が自身の顔へメイクを描くことは過去の行事を身体的に追体験しようとしている。

Part One

The Kagouma (literally, basket horse) is part of the festival at Katsurao's Hachiman Shrine. The Kagouma watches over the procession that accompanies the Omikoshi, a portable shrine carried on the shoulders. Young boys done up with black ink in kabuki-style makeup dress up in cloth-covered baskets and boards cut out in the shapes of horses and parade along.

The makeup was subject to the mischievous whims of the adults and changed every time the festival was held. It has been more than thirty years since the last time the parade was held. During my residency, one of the villagers applied Kagouma makeup for me.

Digression

It snowed during my residency. The scenery was like static on a CRT television.

Part Two

In traditional performance, there is a system called where one inherits a predecessor's name called shuumei. One of the meanings contained in this word is 'to overlap'. We can see this overlapping of actions and practices as we inherit the experience and ethos of previous generations as what gives weight and depth to tradition and keeps it alive.

The children who take part in Kagouma pass down the Kagouma makeup on their faces, and in this process, there is an indirect transmission of physical experience. With the makeup the artist collected in their research as a base, they applied makeup to their own face to physically relive this past custom.

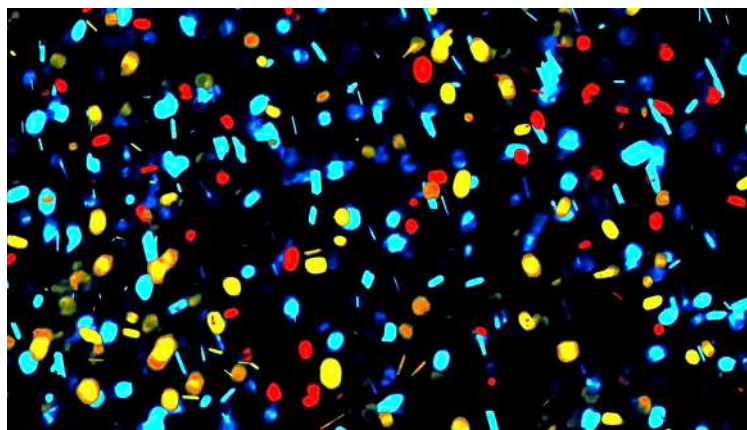
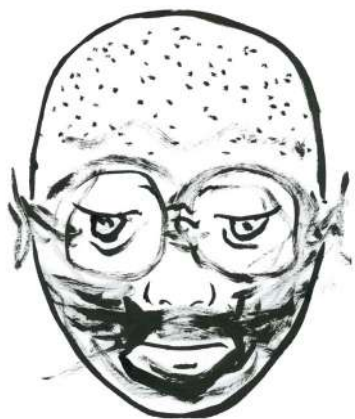
《かさなること / かご馬についてのリサーチ》

The Overlapping Things / Research from Kagouma

映像 8分20秒、ドローイング、資料

Video 8m20s, Drawing, Material





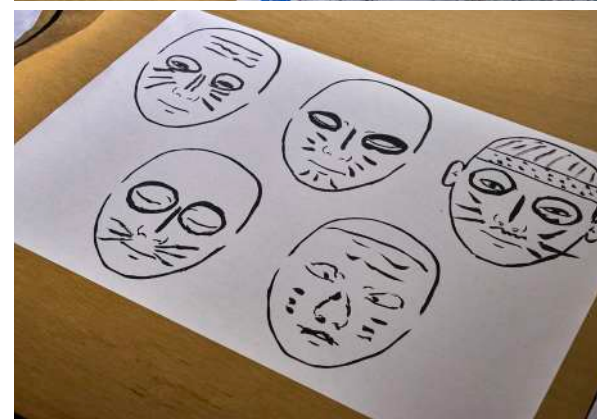
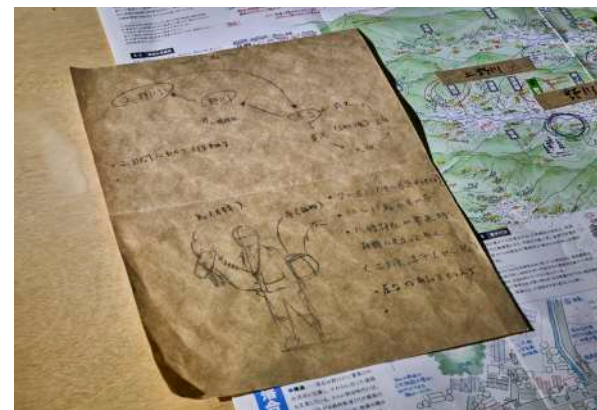
《かさなること / 第一部・閑話・第二部》
The Overlapping Things / Part One, Digression, Part Two

映像 8分20秒 Video 8m20s



《かさなること /
かご馬についてのリサーチ》
The Overlapping Things /
Research from Kagouma

ドローイング、資料
Drawing, Material



協力者：松本忠彦 白岩寿喜
松本敏美 松本宗二 斉原憲一
吉田安男 松本敬一

Collaborators :
MATSUMOTO Tadahiko,
SHIRAIWA Toshikazu,
MATSUMOTO Toshimi,
MATSUMOTO Souji,
SAIBARA Kenichi,
YOSHIDA Yasuo,
MATSUMOTO Keiichi

山田は、数年前から継続的に行っている日時計のプロジェクト《Sun of the City》を起点に、葛尾村ではどのような日時計をつくることが可能かを考えるために、滞在中ワークショップ(以下WS)やリサーチを行った。1月に開催したWS「ミニ日時計をつくろう!」では、葛尾村にかつてあった「百石の家」の古材を使用し村民と共に小さな日時計を制作した。「百石の家」は葛尾村にて帰還困難区域が一部解除されたのち、多くの人に借しまれながら解体された大屋敷で、放射能の影響を受けなかった家屋内部の建材が残されていた。日時計は葛尾村の緯度と経度に合わせられており、私たちのアイデンティティと場所の関係について問いを投げかける。

オープンスタジオでは、WSで参加者と共に制作したミニ日時計と、その制作の様子を記録した映像を展示した他、葛尾村内でつくる日時計のいくつかのアイデアも同時に提示した。

For a number of years, Yamada has been organising a sundial project titled 《Sun of the City》. This was her starting point for the workshop and research she conducted during her residency in Katsurao where she considered what sort of sundial she could create in the village. In January, she ran a workshop titled 'Let's Make a Mini Sundial!' in which she and village residents reused old building materials from the Hyakkoku House to make a miniature sundial. The Hyakkoku House was a large estate that was demolished following the partial reopening of the exclusion zone in Katsurao. The building materials that made up the interior of the house were left behind as they were not exposed to radiation. The sundial is aligned to Katsurao's latitude and longitude. It prompts us to question our identity and relationships with places. At the Open Studio, Yamada showed the sundial created together with the workshop participants and a video record of the creation process, while at the same time presenting a number of ideas for making sundials in Katsurao.



WS「ミニ日時計をつくろう!」の成果物
Creations from the workshop 'Let's Make a Mini Sundial!'

製作協力 木村充伯
Production Collaborator: KIMURA Mitsunori



「百石の家」の記録写真
Documentary photo of the Hyakkoku House

写真提供 一般社団法人 葛尾むらづくり公社 はりゅうウッドスタジオ
Photos courtesy of Community Development Company in Katsurao, Haryu Wood Studio, corp.

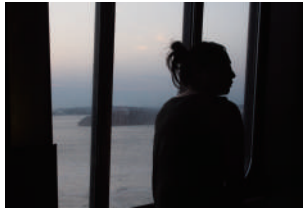


(上) WS「ミニ日時計をつくろう!」の記録映像
24分59秒
映像撮影・編集 鈴木光

(top) Video record of the workshop 'Let's Make
a Mini Sundial!'
24m59s
Filming・Editing SUZUKI Hikaru

(中下) WS「葛尾村の100年前 葛尾村の100年後」

(center, bottom) the workshop 'Katsurao Village
100 years ago and 100 years later'



赤坂有芽
AKASAKA Yume

2009 東京藝術大学大学院 美術研究科修士課程 絵画専攻 修了
2007 東京藝術大学 美術学部 絵画科 油画専攻 卒業

「時間・記憶・アニミズム」をテーマにリサーチを行い、そこから得たイメージやドローイング等の素材をもとに映像やビデオインスタレーションを制作している。
主な活動に、個展「△と布置」(ASK? art space kimura/ 東京 / 2021)、瀬戸内国際芸術祭 (小豆島 / 香川 / 2013, 2016)、六甲ミーツアート (六甲山 / 兵庫、2012, 2017)、動く絵 (SKIP シティ 彩の国ビジュアルプラザ映像ミュージアム / 埼玉、2011) 群馬青年ビエンナーレ (群馬県立近代美術館 / 群馬、2008, 2010)、小豆島アーティストインレジデンス in Spring (小豆島 / 香川、2010) など。

2009 Tokyo University of the Arts, MFA
2007 Tokyo University of the Arts, BFA

AKASAKA Yume creates videos and video installations from materials such as the ideas and drawings that she draws from her research into themes of time, memory, and animism.
Solo Exhibition "△ Constellation" [Art Space Kimura ASK?, Tokyo, 2021] / ART SETOUCHI [shoudoshima-island, Kagawa, 2013, 2016] / ROKKO Meets Art [Rokko, Hyogo, 2012, 2017] / "MOVING TABLEAU" [Sai-No-Kuni Visual Museum SKIP CITY, Saitama, 2011] / GUNMA Young Artists Biennale [The museum of modern art Gunma, Gunma, 2008, 2010] / Artist in Residence in SHODOSHIMA island [shoudoshima-island, Kagawa, 2010]

<https://yumeakasaka.wixsite.com/yumeakasakaworks>



石川洋樹
ISHIKAWA Hiroki

2019 ゴールドスミス、ロンドン大学 MFA 修了
2014 東京藝術大学大学院 美術研究科修士課程 彫刻専攻 修了

近年では構造上の関係を分解し、暗示的なモチーフや主体と客体を入れ替えるなどのシュールレアリスティックな彫刻作品や映像作品を制作している。2017-2020 年まで英国ロンドンに滞在、野村財団 (2017)、ポーラ美術振興財団在外研修員 (2019-2020)
主な活動歴に、「主体と客体」ポーラ美術館 アネックス (2021)、「Temporary Satisfaction」個展 Fizrovia Gallery (2020)、「中之条ビエンナーレ」(2019)、Deptford X / Gold X (2018) など。

2019 Goldsmiths, University of London, MFA
2014 Tokyo University of the Arts, MFA

Hiroki Ishikawa has in recent years produced surrealistic sculptures and videos that deconstruct structural relationships, suggestive motifs and the interchange of subject and object. He lived and worked in the UK from 2017 - 2020 supported by Nomura Art Foundation 2017 and Pola Art Foundation 2019-2020. His artworks have been exhibited in numerical shows, 'Subject and Object' Pola Museum Annex 2021 / Tokyo, 'Temporary Satisfaction' Solo Show Fitzrovia Gallery 2020 / London, 'Nakanajo Biennale 2019' / Gunma, 'Gold X' Deptford X 2018 / London.

Photo ©Kizen

<https://hirokiishikawa.net>

2011 東京藝術大学大学院 美術研究科修士課程 絵画専攻 修了
2009 東京造形大学 美術学科 絵画専攻 卒業

「嘘」をテーマに既存の価値観に揺さぶりをかけるような作品や、リサーチをもとに社会問題を扱いながらもユーモアを交えた作品を制作している。主な活動歴に、個展「ウサギと野ウサギのダンス / 世界最新の洞窟壁画」(アズマティブロジェクト / 横浜、2022)、「中之条ビエンナーレ」(2021)「The Artists' Kalevala, ECHOES FROM THE PAST | TOKYO | BERLIN | KERAVA」(ケラバ美術館 / フィンランド、2018)、「voca 展」(2013)、「第 15 回岡本太郎現代芸術賞」(2012)、個展「Jackson Pollock 新作展」(AIKOKO GALLERY/ 東京、2011) など。

2011 Tokyo University of the Arts, MFA
2009 Tokyo Zokei University, BFA

Exploring the theme of untruth, Yuji creates works that challenge existing values and use research as a basis to examine social issues with a touch of humour.
His work has been shown in solo exhibitions Rabbit and Hare Dance / The Latest of Cave Painting at Azumatei Project in Yokohama (2022) and The Latest Work by Jackson Pollock at AI KOKO GALLERY in Tokyo (2011). He also took part in the Nakanajo Biennale 2021 in Gunma Prefecture (2021), The Artists' Kalevala, ECHOES FROM THE PAST | TOKYO | BERLIN | KERAVA at the Kerava Art Museum in Helsinki (2018), and VOCA 2013 at the Ueno Royal Museum in Tokyo.

<http://yujiota.com>



太田祐司
OTA Yuji

2005 RCA 英国王立芸術大学アニメーション科 修了
2003 ロンドン芸術大学 UAL チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン ファインアート・メディア 卒業

ロンドンと京都を拠点に活動。カラーージュという技法を得意とし、それにより現れる想像風景を通じ独自性の認識と多面的な視点の気付きに関する探究を続ける。アニメーション、オーディオビジュアル・パフォーマンス、インスタレーション、日用品を媒介に、物質と記憶の境界を流動的に行き来できる人間の特性に焦点をあて、今見ているモノを表現する。主な個展に「Noriko Okaku」(Earth+Gallery、東京、2017)、「The Interpreter」(QUAD、ダービー、イギリス、2015)。主なグループ展に「VOCA 展 2019」(上野の森美術館、東京)、「人と科学と現代アート - ステレオタイプを超えてゆけ」(東京工業大学博物館百年記念館、2019) など。ドイツ、カナダ他海外数多くの映像祭に参加、受賞。

2005 Royal College of Art, MA Animation
2003 UAL Chelsea College of Art and Design, BA Fine Art and Media

Based in London and Kyoto. Her work incorporates with animation, audiovisual performance, installation and everyday objects, operated by the method of collage as to explore the recognition of uniqueness and the realisation of multiple perspectives through the imaginary landscapes that emerge from her work. The artist focuses on the human capacity that can access both the material and memory realms, in order to express the moment of 'the thing you are seeing now.'
Selected solo exhibitions include Noriko Okaku (Earth+ Gallery, Tokyo, 2017) and The Interpreter (QUAD, Derby, UK, 2015). Major group exhibitions include VOCA 2019 (The Ueno Royal Museum, Tokyo) and Human, Science and Contemporary Art - Beyond Stereotype, (TIT Centennial Hall Museum, 2019). She has participated in and won awards at numerous film festivals in Germany, Canada and other countries.

<https://norikookaku.com>



尾角典子
OKAKU Noriko



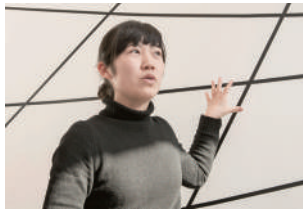
山口 諒
YAMAGUCHI Ryo

2020 東京藝術大学大学院 グローバルアートプラクティス専攻 修了
2015 名古屋芸術大学大学院 美術研究科同時代表現研究領域 修了
2012 名古屋芸術大学 美術学部洋画 2 コース 卒業

1990年長野県生まれ。映像に映し出される「見えない何かの存在」や「存在しているが不明確なもの」をテーマに、映像作品やインスタレーションを制作している。映像作品はノイズのような物質性の見た目をもち、最先端の技術ではなくアナログ的手法を使いながら、映像の構造を再構築しようとしている。
主な展覧会に「押入れ百貨店」(旧廣盛酒造、群馬、2020)、「中之条ビエンナーレ 2021」(中之条町、群馬、2021)、「山の向こう側へ / BEYOND THE MOUNTAIN」(穂高学習交流センター「みらい」ギャラリー、長野、2020)、「Perception Practice / チカク」(遊工房アートスペース、東京 2020)、「共同体のジレンマ - Community and Self-」(旧門谷小学校、愛知、2018)

2020 Tokyo University of the Arts, Global Art Practice, MFA
2015 Nagoya University of the Arts, MFA
2012 Nagoya University of the Arts, BFA

Born in 1990 in Nagano Prefecture, Yamaguchi Ryo creates video works and installations that explore the existence of invisible things and things that exist but are obscured. Visually, his video works have a noise-like materiality and he employs analog methods rather than new technologies as he attempts to reconstruct the video medium. Selected exhibitions include OSHIIRE Department at the former Hirozakari Brewery in Gunma Prefecture (2022), the Nakanajo Biennale 2021 in Gunma Prefecture (2021), BEYOND THE MOUNTAIN at Hotaka Community Learning Centre's Mirai gallery in Nagano Prefecture (2020), Perception Practice at Youkobo Art Space in Tokyo (2020), and Community and Self at the old Kadoya Elementary School in Aichi Prefecture (2018).



山田 悠
YAMADA Haruka

2014 デジジョン国立高等美術学校 DNSEP アート課程 修了
2012 デジジョン国立高等美術学校 DNAP 空間デザイン課程 修了

2つの領域での学びを通じて都市空間におけるアートの実践に興味を持つ。変動する都市環境の中で自らの行為をどのように作品として成立させることができるかについて関心を持ちながら、都市、自然、人間という要素を相対的に捉え、ものごとの関係を測り直す。主な展覧会に「黄金町バザール2020 —アーティストとコミュニティ」(2020年、神奈川)、「Nocturne」(2022年、POETIC SCAPES、東京)、「瀬戸内国際芸術祭2022」(2022年、香川)など。また「ゲンビどこでも企画公募」入選(2016年、広島市現代美術館、広島)、「Prix Dauphine pour l'art contemporain」グランプリ(2015年、パリ、フランス)受賞。

2014 Ecole Nationale Supérieure d'Art et Design de Dijon, MA in Fine Art
2012 Ecole Nationale Supérieure d'Art et Design de Dijon, BA in Space Design

Her studies in these two areas led her to focus on the practice of art in real urban spaces. She is interested in how to realise her own actions in the fluctuating environment of the city in her work, measuring the relative relationships between the city, nature, and human beings. She has participated in exhibitions including "Koganecho Bazaar 2020 Artists and Communities" in Kanagawa, "Nocturne" at POETIC SCAPES in Tokyo (2022), and the "Setouchi Triennale 2022" in Kagawa. Her work was selected in the Hiroshima City Museum of Contemporary Art's "Dokodemo Open Call" in 2016 and she won the Grand Prix of the "Dauphine Prize for Contemporary Art" in Paris in 2015.

<http://harukayamada.net>

Katsurao AIR について

Katsurao AIR は福島県葛尾村内にて実施するアーティスト・イン・レジデンスプログラムです。参加アーティストによる活動による地域コミュニティへの実践を通して、地域資源の発掘や発信に焦点を当てた活動を行なっています。彼らの活動や広報からの広がり、交流人口の増加、人的ネットワークの構築などを生じさせるきっかけとなり、この地域にアート活動による多様な観点を育みながら新たな共同体のありかたを、立場を超えて共に模索することを目的にしています。

2022年度のプログラムでは、葛尾村で約30日間の滞在活動を行った6名の招聘アーティストたちが、それぞれに調査の対象を定め活動や制作を行いました。前期プログラムでは、赤坂有芽は村民へのインタビューから昔の暮らしや慣習などを聞き取り、その痕跡をフィールドワークにて探索し、石川洋樹は対象を見つめることの奥深さと滞在することで知る地域構造についてを考察し、その調査をもとにして制作された作品を、展覧会として公開いたしました。後期プログラムでは、太田祐司は葛尾村の新しい物語を紡ぐ人たちと協働した活動を、尾角典子は震災後に新しくできた産業や事業から発展していく未来の村の可能性を想像し、山田悠は葛尾村の人々の生活と自然の関わりの中でつくることができる日時計の可能性を探り、山口諒は途絶えた催事の一つであるかご馬(籠馬)の化粧について村民にインタビューを行う傍ら彼らが自在に描くドローイングを収集しました。アーティストたちは調査した事物を、自身のテーマと合わせた制作や活動について、オープンスタジオにて公開いたしました。

アーティスト・イン・レジデンスとは、国内外からアーティスト等の招聘などを一定期間行い、滞在中の活動を支援することをいいます。活動が積み重なり、地域と外部の交流が活発になることにより、新たな地域特有の価値を再構築する場が開かれることでしょう。

アーティストの知性と感性により拾い上げ創造される言語だけではない表現を、共に注意深く見つめることにより、私たちの思考や対話が個々の内面から他者へと開かれる、創造的な未来が葛尾村に広がることを願っております。

キュレーター 山口貴子

Katsurao AIR is an artist in residence program held in the village of Katsurao in Fukushima Prefecture, focused on uncovering and promoting local resources through inviting artists to practice in the local community.

With the projects and PR work undertaken by the artists as a catalyst to increase visitors to the village and build human connections, this program aspires to foster the diverse perspectives that art can bring to this region, transcending our different circumstances to explore new ways to be in community.

In 2022, the program invited six artists to live and work in Katsurao for around thirty days. Each artist settled on a research subject, then carried out their project and produced artworks.

In the first term, Akasaka Yume conducted interviews with the villagers, then followed these with fieldwork to hunt for evidence of the past customs and ways of life they told her about. Ishikawa Hiroki considered the profound experience of looking deeply, as well as the inner workings of the community that he saw during his stay. He then created and exhibited artworks based on his investigations.

In the second term, Ota Yuji collaborated with a group creating a new story for Katsurao. Okaku Noriko imagined possible futures for the village from the growth of the new industries and initiatives that sprang up after the 2011 disaster. Yamada Haruka explored possibilities for building sundials from the interplay between our daily lives and nature. Yamaguchi Ryo interviewed the villagers about the makeup used in the lost festival tradition of Kagouma and collected their spontaneous drawings. The artists held an Open Studio they presented their research.

In an artist in residence program, creators are invited from within Japan and abroad to stay for a fixed-term, during which they are supported in their activities. These activities contribute to more active exchange between the location of the residency and other areas, thereby creating a space to put together in new ways the community's unique merits.

Workshop Vol.1

ニット工場で使われなくなった糸を使って タッセルを作ろう！

*Let's Use Unused Yarn From the Knit Factory
and Make Tassels!*

葛尾村に工場を持つ金泉ニット株式会社に協力を依頼して実施。講師の大内はニット生産時に出る残糸に着目し、糸の素材や残糸の活用方法などのリサーチを行いました。ワークショップでは、工場に残ってしまった糸そのものを主役に「タッセル」作りをしました。参加者は高品質で多様な糸に触れることを通して、素材そのものの良さ、面白さを味わいながら「タッセル」作りに集中していました。参加者は出来上がったタッセルをアクセサリにしたり、カーテン留めにしたりと思い思いの形に仕上げていました。

参加者人数：13名
日時：2022年7月3日(日) 9:00-11:30

This workshop was realised with the cooperation of Kinsen Knit Co., which has a factory in Katsurao. Ouchi, the workshop leader, became interested in the yarn that went leftover in the process of producing knit goods. She investigated ways to make use of yarn in general and these leftovers. In the workshop, this leftover yarn from the factory was given centre stage as it was used to make tassels. The participants got to handle a wide variety of high quality yarn and as they worked on their tassels they came to enjoy and appreciate the material. From accessories to curtain ties, each participant put their own spin on their tassel.

Number of Participants : 13
Time: 9am-11.30am Sunday July 3 2022

Workshop Leader

講師紹介

大内 梨沙 OUCHI Risa

2002 千葉県生まれ
2021 金泉ニット株式会社葛尾工場にて
インターン生として活動
2022 東洋大学在籍中

2002 Born in Chiba Prefecture.
2021 Interned at Kinsen Knit Co.'s factor in Katsurao.
2022 Enrolled at Toyo University.



Workshop Vol.2

糸を使った尾っぽ作り

Making Tails with Yarn

葛尾村の名前と馬の名産地であったことに由来し、「尾っぽ」を作るワークショップを行いました。ワークショップでは、葛尾村にある金泉ニット株式会社からの残糸と京都の糸屋の様々な種類の糸を使用。

制作物は2種類。1つ目は、土台となる糸に他の糸を巻きつけることでふさふさとした尾っぽになるもの。キーホルダーやネックレスになるように仕立て完成しました。

2つ目は、機織りの中で最も原始的な織である腰ばたでタテ糸とヨコ糸によって織るタイプ。時間をかけて織っていくことで、長細く丈夫な尾っぽになり、ベルトやかばんの持ち手として糸が生まれ変わっていきました。

手を動かすことの楽しさと、糸が自分の日常を彩るものの形になっていくことの喜びを味わえるワークショップとなりました。

参加者人数：12名

日時：2022年8月7日(日) ①9:00-11:30 ②13:00-15:30

One of the characters of Katsurao means tail and it was once a region famous for horse breeding. This is where the idea for a workshop making tails came from. We used a variety of yarns including leftovers from the Kinsen Knit Co. factory in Katsurao and others from a yarn company in Kyoto.

Participants made two kinds of tail. For the first, they chose yarn to be the base then wrapped other threads around it to make a bushy tail that when completed could be used as a keyholder or necklace. For the second, they used a backstrap loom, the most ancient kind of loom where horizontal and vertical strands of yarn are woven together. By spending time on their weaving, the participants created tails that were long, thin, and strong, and the yarn was given new life as belts and bag straps. In this workshop, the participants experienced the joy of working with their hands and seeing the yarn transform into something to bring colour to their daily lives.

Number of Participants : 12

Time : ① 9am-11.30am ② 1pm-3pm Sunday August 7 2022

Workshop Leader

講師紹介

岡崎みゆき OKAZAKI Miyuki

1987 山口県生まれ
2010 京都芸術大学染織コース卒業
2022 京都の糸屋に勤めながら活動中

[展覧会]

2020 BOX 女子会 (京都)
2019 透明な喫茶店 (京都)、
星屑カルテ (福島、喜多方)
2018 クズカズラからユキムシへ テキスタイル
展、足漕ぎボートに乗って (京都)
2017 I SPY WITH MY LITTLE HAND テキス
タイル展 (京都)

1987 Born in Yamaguchi Prefecture.
2010 Graduated from the textiles course at the Kyoto University
of the Arts.
2022 Working as an artist while employed at a yarn company in
Kyoto.

[Past Exhibitions]

2020 BOX Girl's Club in Kyoto.
2019 Transparent Cafe in Kyoto
Stardust Chart in Kitakata, Fukushima.
2018 From Kudzu Vines to Snow Bugs Textile Exhibition Ride the
Pedal Boat in Kyoto
2017 I SPY WITH MY LITTLE HAND Textile Exhibition in Kyoto.



Workshop Vol.3

身近な植物から葛尾村の色を見つけよう

Discover the Colours of Katsurao With Common Plants

このワークショップは井上が葛尾村に自生している植物をリサーチすることから始まりました。葛尾村を歩き植物をリサーチした中から、ワークショップを開催する季節や植物の量から使用する草木を決定しました。当日は、身近な植物である「赤麻」「猪小槌」「大待宵草」の3種類を煮出して布を染め、葛尾村の色を見つけることを試みました。染めた時の模様は、染色技法の中でも一番歴史の古い顔織（こうけち）の板締め絞りをし模様付けをしました。

作品の完成時には、予想を超えた色や模様を楽しみながら参加者それぞれの作品を見て楽しみました。それぞれの場所に戻っても、葛尾村の色が手ぬぐいとしてだけでなく、参加者の記憶として残っているのではないのでしょうか。

参加者人数：15名

日時：2022年9月4日(日) 13:00-16:00

Inoue began by researching the native plants of Katsurao. She walked around the village and decided which she would use based on the amount of each plant and the season in which the workshop would be held. On the day of the workshop, she and the participants took three common plants, akaso, inokozuchi, and large-flowered evening primrose, and boiled them and dyed fabrics to try and find the colours of Katsurao. She used itajime shibori, a technique from Japan's oldest kokechi style of manual resist dyeing to apply the patterns to the fabric. The patterns and colours of the finished creations exceeded all expectations and the participants enjoyed looking at each other's work. After everyone went home, the colours of Katsurao live on not only as tenguji towels, but in the memories of the workshop participants.

Number of Participants : 15

Time: 1pm-4pm Sunday September 4 2022

Workshop Leader

講師紹介

井上康子 INOUE Yasuko

2012 京都造形芸術大学大学院（現京都芸術大学）
芸術研究科芸術表現専攻 修了
2013-2018 京都造形芸術大学 美術工芸学科 染織テキスタイルコース 非常勤講師
2022 東京を拠点に活動中

[展覧会]

2020 写真と染めのまじわるところ／染・清流館(京都)
2016 PAT in KYOTO 京都版画トリエンナーレ／京都市美術館(京都)
2014, 2015, 2017 京都銭湯芸術祭／京都市内の銭湯 計17か所(京都)

[受賞歴]

2021 京都府新鋭選抜展 Kyoto Art for Tomorrow
日本経済新聞京都支社賞

2012 MFA in Textile Dyeing at Kyoto University of Art and Design (Now Kyoto University of the Arts).
2013-2018 Part-time instructor in textile dyeing at Kyoto University of Art and Design.
2022 Working based in Tokyo.

[Past Exhibitions]

2012 Intersection of Photography and Dyeing Arts at the Musée de Somé Seiryu in Kyoto.
2016 PAT in KYOTO Kyoto Print Art Triennale at the Kyoto city KYOCERA Museum of Art.
2014, 2015, 2017 Kyoto Sento Art Festival at 17 Sento baths around the city of Kyoto.

[Awards]

2021 The Nihon Keizai Shimbun Kyoto Award at Kyoto Art for Tomorrow



Workshop Vol.4

葛尾村で『やり場のないもの』たちについて考える

Thinking about Scattershot Things in Katsurao

「やり場のないもの」とは、すごく大切に扱っているものでもなく、かといって捨ててしまったら喪失感を抱きそうなもの。そのことを、竹村が村民に丁寧に説明し、何度も来村して色々な人とコミュニケーションをしてワークショップの準備が進みました。会場に竹村、参加者、村民の「やり場のないもの」が並べられ、その「やり場のないもの」を見ながら竹村の問いかけで、想像したり、参加者同士で質問をしながら、ワークショップが始まりました。「やり場のないもの」とは、どうして「やり場のないもの」なのか、またそれらをもし残すのであればどのような残し方が考えられるのかなど、対話を通して考えていきました。参加者は「やり場のないもの」について、新たな捉え方と、思考の体験を持ち帰るワークショップとなりました。

参加者人数：6名

日時：2022年10月1日(土) 14:00-17:00

Scattershot things may not be treasured items, but you would feel their absence if you threw them away. So Takemura explained to the villagers, visiting Katsurao on numerous occasions and talking to all kinds of people as she planned the workshop. At the workshop venue, he laid out the scattershot things belonging to himself, the participants, and the villagers. The workshop began with them all observing these items while Takemura asked questions prompting the participants to use their imaginations and ask each other questions. What makes scattershot things scattershot things? If you were to keep them, how could you do that? The workshop participant considered such questions through discussion, taking home with them a new perspective and a conceptual experience.

Number of Participants : 6

Time: 2pm-5pm Saturday October 1 2022

Workshop Leader

講師紹介

竹村望 TAKEMURA Nozomi

1992 京都府生まれ
2019 情報科学芸術大学院大学 メディア表現研究科修了

1992 Born in Kyoto
2019 Graduated from the the Department of Media Creation at the Institute of Advanced Media Arts and Sciences

[活動履歴]

2014- 京都銭湯芸術祭のメンバーとして活動
2015- 福島県西会津町にて「西会津国際芸術村 C 塾」
「こととか」のメンバーとして活動
2019 映像作品『同じ月を見つめて』
2022 パフォーマンス作品『消費生活パフォーマンス 24』

[Past Activities]

2014- Member of the Kyoto Sento Arts Festival
Member of Nishiazumi International Art Village
2015- C-Juku and Kototoka
Onaji Tsuki wo Mitsumete (Gazing at the Same Moon) video work
2019 Shouhi Seikatsu Performance 24 (Consumer Life Performance 24) performance work



Workshop Vol.5

葛尾村の稲から藁もじりをして 正月飾りを作ろう

*Let's Make Nawa Mojiri New Years' Decorations
from Katsurao Rice Plants*

かつて葛尾村では冬の仕事として人々が寄り合って藁をもじり、紐や色々な生活の道具を作っていたという話がありました。それがコミュニケーションの大切な場になっていたのではないかと思います。企画を立ち上げました。現在葛尾村において、藁もじりは行われていないため、藁もじりができる村民を探し、講師をお願いしました。また、葛尾村内で育った稲を素材としました。ワークショップ当日は、初めて藁もじりをする参加者が多く、はじめは苦戦していましたが、手を動かし続けることで藁もじりができるようになりました。また、一緒に活動することで、村内外の人が自然と会話をする光景が生まれました。また、いろいろなしめ縄の形があることがわかり、記録としては残されていない日常の中に大切な文化があることが分かりました。

参加者人数：12名

日時：2022年12月4日(日) 9:00-12:00

In the past, the people of Katsurao would come together and twist straw as their winter occupation. They say they made rope and all kinds of other household items. This must have been an important place for communication, and that is what this workshop is based on. In present day Katsurao, nawa mojiri (straw twisting) is no longer practiced, so we sought out a villager who knew how and asked them to lead the workshop. We decided that we would use rice grown in Katsurao. On the day of the workshop, most of the participants, who had never done nawa mojiri before, struggled at first, but they kept working at it and eventually were able to do it. Conversations naturally sprang up between people from the village and outside it as they worked together. We learnt that shimenawa ropes come in all different shapes and that there are important parts of culture that have gone unrecorded.

Number of Participants : 12

Time: 9am-12pm Sunday December 4 2022

Workshop Leader

講師紹介

遠藤 英徳 (葛尾村村民)	ENDO Hidenori
丹伊田 政治 (葛尾村村民)	NIITA Masaharu
松本 和雄 (葛尾村村民)	MATSUMOTO Kazuo



Workshop Vol.6

ニット工場で使われなくなった糸を使って ポンポンフクロウを作ろう

*Let's Use Unused Yarn From the Knit Factory
and Make Pompoms*

かつらお企画室では2021年から、葛尾村に工場を持つ金泉ニット株式会社から素材の提供や工場見学など多方面で協力をいただき活動をしています。残った糸や素材などを有効活用方法と一緒に考えることを通して、葛尾村の新たな素材になることを試んでいます。今回のワークショップでは、参加者と工場勤務する社員の方々と一緒に珍しい工業糸を扱う機会を通して、残糸の新たな活用方法を考えるきっかけづくりとなりました。参加者は沢山ある糸に触れながら、思い思いのフクロウをつくりあげ、糸やニットという素材について知識を得る機会となりました。

参加者人数：15名

日時：2023年1月29日（日）9:00-12:00

Since 2021, the Katsurao Workshop Space has received a wide range of support for its activities from Kinseikin Knit Co., which has a factory in Katsurao. This has included the supply of materials and factory tours. Thinking up ways to utilise leftover yarn and materials, the hope is that these will become a new resource for Katsurao. This workshop was an opportunity for participants and factory employees to think of new ways to use leftover yarn, using a rare machine for processing industrial yarn. The participants used many different yarns to make their own one-of-a-kind owls while learning about knit textile and yarn.

Number of Participants : 15
Time : 9am-12pm Sunday January 29 2023

Workshop Leader

講師紹介

松本夕美 MATSUMOTO Yumi

金泉ニット株式会社 福島工場勤務 Works at the Kinsen Knit Co. factory in Fukushima.



かつらお企画室について

再発見の共有

かつらお企画室では「葛尾村の日常の中にある魅力」をアーティストやクリエイターの視点から再発見する活動を重視してワークショップ企画を行いました。アーティストやクリエイターの活動はまず村内リサーチから始まります。そのリサーチによってワークショップで使用する素材やテーマなどを決めていきます。ワークショップでは、アーティストやクリエイターが再発見した葛尾村の「もの」や「こと」を体験を通して、多くの人と共有しています。体験と一緒にする時間の中で、新たな発見を伝えること、そしてそこから会話が生まれ人々との繋がりへと発展する場を作ることが、私たちかつらお企画室の役割であると考えています。アーティストやクリエイターと葛尾村との接点を生み出し、それを支えていくことで、現代という時代の中において、葛尾村の文化や資源の価値が見えてくると感じています。現代という時代の中に「再発見」をどのように落とし込み、次の時代に繋げていくかを思考し、実行するためには、多様な視点が必要です。引き続き、ワークショップ企画や村内外問わず葛尾村での活動を希望する人たちと一緒に活動が続けていきたいと思っています。

コーディネーター 大山里奈

The Katsurao Workshop Space

Sharing rediscovery

At the Katsurao Workshop Space, we run workshops focused on the work of artists and creators to rediscover from their own perspectives the magic in the everyday in Katsurao. Their work first begins with research in the village, which leads them to decide on the materials and themes of their workshop. In the workshops themselves, the artists and creators create experiences of their rediscoveries in Katsurao, both tangible and intangible, to share them with many people. We at the Katsurao Workshop Space see our role as creating a place where people can communicate new discoveries while taking part in a shared experience, and for people to forge connections out of the conversations that emerge there.

We feel that by creating a point of contact between artists, creators, and Katsurao and continuing to foster it, our eyes will be opened to the value of Katsurao's resources and culture in this modern age. We need a multiplicity of perspectives if we are to consider and enact the applications of these rediscoveries. Going forwards, we hope to continue conducting the workshops and working together with anyone who wants to work here in Katsurao, no matter where they come from.

Coordinator OHYAMA Rina



アーティストとの協働は 認知症予防(になるかもしれない)

「アーティストと一緒に作品をつくるのが認知症予防になると思っています。」

これは私が「鳥取藝住祭」というアーティスト・イン・レジデンスをベースにした芸術祭のディレクターを務めた際、鳥取県のとある町の方から聞いた言葉です。その方が言うには、毎年様々なアーティストがやってきては、日常では思いつかない「突飛な」ものを作りたいと提案してくるそうです。そうした提案があがる度に、その地域で暮らす人々で集まり食事をしながら「〇〇さんは昔自動車の修理工場にいたから板金加工できるんじゃない？」や「アーティストと一緒に学生さんが来るらしいからご飯の準備は誰がする？」など、アーティストのプラン実現のためにあれこれ話をして準備を行うそうです。心の中では「よくわからんものを作るなあ」と思いつつも、それをどうやったら作れるか頭を使って知恵を出し合い、そして体を使ってアーティストたちと共に制作に取り組む。初めての試みを実現させるために心身をフル回転させることが「結果的に」認知症予防に繋がると感じているそうです。同時に、終わったあとはその制作の思い出や苦労などを一緒に活動した方々と語り合うことで、住民間の関係が良好になっていく気がすると笑いながら話してくれました。

私はこの方にお会いする前から様々な場所でアーティスト・イン・レジデンスの実施に関わってきましたが、これほどまでに明確かつ楽しそうに、地域住民の方からアーティスト・イン・レジデンスに対する評価を聞いたことがなく、強い衝撃を受けたことを今でもよく覚えています。アーティスト・イン・レジデンスを実施することで「地域活性化」や「商店街の賑わい」を目指すということは、様々なところで見聞きます。私自身も初めて実施する地域ではそのように住民の方に説明することも多いです。しかし、それをまさか「認知症予防(になっている気がする)」という、より個人にとって重要なテーマと結びつけて語られるとは思っていませんでした。あいにく、アートプロジェクトに関わることが認知症予防につながるという明確な医学的根拠は持ち合わせていません。しかし「認知症予防」と信じ、自分自身が培ってきた様々な知見や技術、ネットワークなどを全く新しい「何か」の実現のために役立てることが新しい生きがいになっているのであれば、それは素晴らしいことだと思います。そして、同じくらい重要なのは地域の人々が初めて接するものを拒絶するのではなく、受け入れる柔軟性と寛容性を持っているということだと思います。

アーティストは一つの風景や空間の中から、独自の視点で何かを捉え、それらを作品やプロジェクトという形で可視化・具現化することを試みます。特にアーティスト・イン・レジデンスでは、自分のスタジオや日常生活から離れた環境に身を置くからこそできる実験的な作品制作に取り組もうとするアーティストも多く、その

場合、アーティスト自身もどのようなものが完成するのか、事前段階では的確に言葉で説明することができない場合もあります（それもしばしば）。そのため上述した地域だけでなく、アーティスト・イン・レジデンスの現場ではいつもたくさんの「分からない」が生まれていくわけですが、そうしたことを「分からないからできない」と拒絶するのではなく、その「分からないさ」を一旦引き受け、対話と考察を重ねながら、実現の方法を見出していく過程で様々な発見が生まれてくるのがアーティスト・イン・レジデンスの面白さだと考えています。

アーティスト・イン・レジデンスの実施によって、今後葛尾村には「よく分からない」ことを企てるアーティストが定期的に滞在するでしょう。そしてその実現のためにアーティスト、地域住民、コーディネーターらが奮闘し楽しみながら歩んでいく先に、一体、どんな景色や関係性が生まれていくのでしょうか。「地域づくり」や「地域経済の活性化」といった大きく力強いビジョンの実現と共に、ぜひとも「個々人の認知症予防(になるかもしれない)」や「分からないことを実現させた喜び」といった、一人一人の人生にとって小さくとも確度のある実感をもたらす活動として発展していった欲しいと、隣接する富岡町から願っています。

林 曉甫

NPO 法人インビジブル
理事長／マネージング・ディレクター

1984 年東京都生まれ。立命館アジア太平洋大学在学中より NPO 法人 BEPPU PROJECT の活動に携わり、公共空間や商業施設などでアートプロジェクトや国際芸術祭の企画運営に従事。2013 年に同社退職後、フリーランスでの活動を経て、2015 年に NPO 法人インビジブルを設立。現在は、東京と福島県双葉郡富岡町の二拠点を軸にアートを触媒にした活動に取り組む。女子美術大学非常勤講師（東京、2017～2022）。

<https://invisible.tokyo>

Coproduction With Artists : A (Possible) Defense Against Dementia

"I think creating things together with artists helps to keep dementia at bay." This was said to me by a person in a town in Tottori Prefecture back when I worked as director at the residency-based art festival, Tottori Geijusai. This person told me that the artists came every year with ideas for creating "offbeat" things, things that never would have occurred to them ordinarily. Every time these artists came with their proposals, the locals got together. Over a meal, they discussed how to get things ready so that the artists could carry out their plans. "Such-and-such used to work at a factory fixing up cars back in the day, so they could do panel-beating, couldn't they?" "Apparently there are students coming with the artists. Who's going to prepare the meals?" Privately, they thought, "I don't understand these things they're making." But even so, they got their minds working, sharing knowledge to work out how to make things happen, and their bodies working as they helped with the artists' creations.

This person said they felt like putting their minds and bodies on full throttle like that to do things they had never done before would end up keeping dementia at bay.

With a smile, they told me they thought everyone was getting on better thanks to the conversations they had had after working together about what they remembered and what they had struggled with.

Before I met this person, I had been involved in artist in residence programs in various different places, yet I had never heard such happy and emphatic praise before. I still remember the strong impression it made on me.

I see a lot of places aiming for "regional revitalization" or to "bring life back to the downtown" . I said similar things to the residents of the first location I ran an AIR program in. It never occurred to me that the program could connect with something like a (possible) protection against dementia, which carries so much more weight for individual people.

Unfortunately, I do not have any concrete medical basis to tie involvement in art projects with warding off dementia. But if someone believes it does and can find new purpose in their life using all the knowledge and skills and connections they have fostered over the years to help create something new, I think that is wonderful. Something else I think is just as important is that the locals are flexible and accepting enough to encounter new things and welcome rather than reject them.

Artists find unique ways of looking to draw out of a given scene or space something that they then attempt to visualise and give form to through their work. Artist residencies in particular are often applied to by artists working on the kind of experimental art production that can only be realised when they place themselves in a new environment away from their own studio and their ordinary lives.

These artists themselves sometimes (usually, even) cannot accurately explain what the finished product will be in the early stages.

This means there are always lots of "I don't understand" s for the artists as well as the locals. But instead of saying, "I don't understand so I can't do it," we embrace that unknown-ness.

The discoveries that get made in the process of discussing and investigating how to make things work are, in my opinion, the fun of the artist residency.

Thanks to this residency program, Katsurao will enjoy the regular presence of artists planning things that we do not understand at all. When the artists, the residents, and the coordinators get together to butt heads and have fun bringing those plans to fruition, who knows what sights we will see and what connections will emerge?

As I write this from the neighbouring town of Tomioka, my hope is that alongside the big, bold goals like community-building and economic revitalization, we also move towards doing the kind of work that leaves small but sure impressions on the lives of individual people, like the sense that maybe they are keeping dementia at bay, or the joy of pulling off something you do not understand.

Profile

HAYASHI Akio

NPO inVisible
Chairman / Managing Director

Born in Tokyo in 1984. Became involved in NPO BEPPU PROJECT while enrolled at Ritsumeikan Asia Pacific University, working on planning art projects and international art festivals in public spaces and commercial facilities. In 2013, he left BEPPU PROJECT and worked as a freelancer before establishing the NPO inVisible in 2015. He is now based between Tokyo and the town of Tomioka in Fukushima prefecture where he works on projects using art as a catalyst. He taught part-time at Joshibi University of Art and Design in Tokyo from 2017-2022.

<https://invisible.tokyo>

2022年度 メディア実績

【雑誌】

ソトコト9月号 2022年8月5日発売 株式会社ソトコト・プラネット

【新聞】

福島民報 2022年6月24日
福島民報 2022年9月24日
福島民友 2022年9月24日

【テレビ放送】

KFB福島放送「ふるさとシェア」 2022年7月28日
NHK福島放送「はまなかあいづ TODAY」 2022年9月28日
KFB福島放送「ふるさとシェア」 2023年1月24日

【ラジオ放送】

NHK福島「ふるさとツアーズ」コーナー出演 2022年8月5日
ラジオ福島「浜通り応援ラジオ番組 明日へ」コーナー出演 2022年11月12日

【Webサイト】

未来をつくるSDGsマガジン ソトコト 2022年10月24日

【刊行物】

Katsurao AIR トークイベント「持続可能性への新しい道」チラシ
Katsurao AIR 前期活動報告会チラシ、ポスター
Katsurao AIR 後期オープンスタジオチラシ、ポスター
Katsurao AIR ワークショップ「ミニ時計を作ろう！」チラシ

かつらお企画室 ワークショップ 前期チラシ、ポスター
かつらお企画室 ワークショップ 後期チラシ

Katsurao Collective 新聞 2022年9月号
Katsurao Collective 新聞 2023年1月号
Katsurao Collective 新聞 2023年4月号

事業構造

事業図



Katsurao AIR 実施企画・イベント

実施日	内容	来場者(視聴者)
6月25日	トークイベント「持続可能性への新しい道」 石川洋樹 ゲスト: 田尾陽一 (オンライン配信) 会場: 葛尾村復興交流館あぜりあ 交流スペース 1	31(18)
6月25、26日	石川洋樹 過去作品展示《Dear Humans》 会場: 葛尾村復興交流館あぜりあ 蔵	43
9月23日-10月10日	アーティスト・イン・レジデンス前期活動報告会 赤坂有芽 石川洋樹 Travel in the Hole 会場: 葛尾村立葛尾中学校(休校中)	226
9月23日	レセプションパーティー	39
9月24日	アーティストトーク 赤坂有芽 石川洋樹 ファシリテーター: 五十嵐純 (オンライン配信) 会場: 葛尾村復興交流館あぜりあ 交流スペース 1	24 (25)
9月23日-10月10日	アーティスト・イン・レジデンス前期活動報告 赤坂有芽 会場: 葛尾村復興交流館あぜりあ 交流スペース 2	1610
12月16日-1月29日	ワークショップ会場設置「葛尾村の100年前 葛尾村の100年後」 山田悠 会場: 葛尾村復興交流館あぜりあ 交流スペース 2	1933
1月15日	ワークショップ「ミニ時計を作ろう！」 山田悠 会場: 葛尾村復興交流館あぜりあ 交流スペース 2	5
1月27日-29日	アーティスト・イン・レジデンス後期活動報告会 太田祐司 尾角典子 山口諒 山田悠 オープンスタジオ 会場: 葛尾村立葛尾中学校(休校中)	88
1月28日	アーティストトーク 太田祐司 尾角典子 山口諒 山田悠 (オンライン配信) 会場: 葛尾村立葛尾中学校(休校中) コンピューター室	20 (25)

かつらお企画室 実施イベント

実施日	内容	来場者(視聴者)
7月3日	「ニット工場で使われなくなった糸を使ってタッセルを作ろう！」 講師: 大内梨沙 (オンライン配信)	12 (1)
8月7日	「糸を使った尾っぽ作り」講師: 岡崎みゆき	12
9月4日	「身近な植物から葛尾村の色を見つけよう」講師: 井上康子	15
10月1日	「葛尾村で『やり場のないもの』たちについて考える」講師: 竹村望	6
12月4日	「葛尾村の稲で縄もじりをして正月飾りを作ろう」講師: 遠藤英徳、 丹伊田政治、松本和雄	12
12月17日-1月20日	「出張かつらお企画室」岡崎みゆき 井上康子 作品展示 会場: せせらぎ荘	540
1月29日	「ニット工場で使われなくなった糸を使ってポンポンフクロウを作ろう」 講師: 松本タ美	15

Kasturao AIR 参加作家

赤坂有芽 石川洋樹 太田祐司 尾角典子 山口諒 山田悠

かつらお企画室 講師

大内梨沙 岡崎みゆき 井上康子 竹村望 遠藤英徳 丹伊田政治 松本和雄 松本タ美





Katsurao Collective

活動記録 2022

Katsurao Collective

事業統括：森健太郎
マネージャー：大井田弘子
キュレーター：山口貴子
コーディネーター：大山里奈
広報：上野莉歩

[カタログ]

デザイン：marutt Inc.
(西山里佳、齋藤亮太、川田季代)

写真：永井文仁

写真提供：Katsurao Collective、
太田祐司、山口諒

翻訳：シルヴィア・ギャラハー

発行：Katsurao Collective 事務局
〒979-1602 福島県双葉郡葛尾村落合菅ノ又14
<http://katsurao-collective.com>

発行日：2023 年 3 月 31 日

印刷：植田印刷所

実施：一般社団法人 葛力創造舎
企画運営：Katsurao Collective
協力：一般社団法人 葛尾むらづくり公社
金泉ニット株式会社

本事業は葛尾村より「令和4年度 葛尾村アーティスト移住・定住促進事業」を
一般社団法人 葛力創造舎が委託され実施しています。
無断転載禁止／作品、寄稿文の著作権は各製作者および執筆者に帰属します。

Katsurao Collective
Report 2022

Katsurao Collective

Director：MORI Kentaro
Manager：OIDA Hiroko
Curator：YAMAGUCHI Takako
Coordinator：OHYAMA Rina
Public Relations：UENO Mariho

[Catalog]

Design：marutt Inc.
(NISHIYAMA Rika, SAITO Ryota, KAWATA Kiyo)

Photo：NAGAI Fumihito

Photo provided：Katsurao Collective,
OTA Yuji, YAMAGUCHI Ryo

Translate：Sylvia Gallagher

